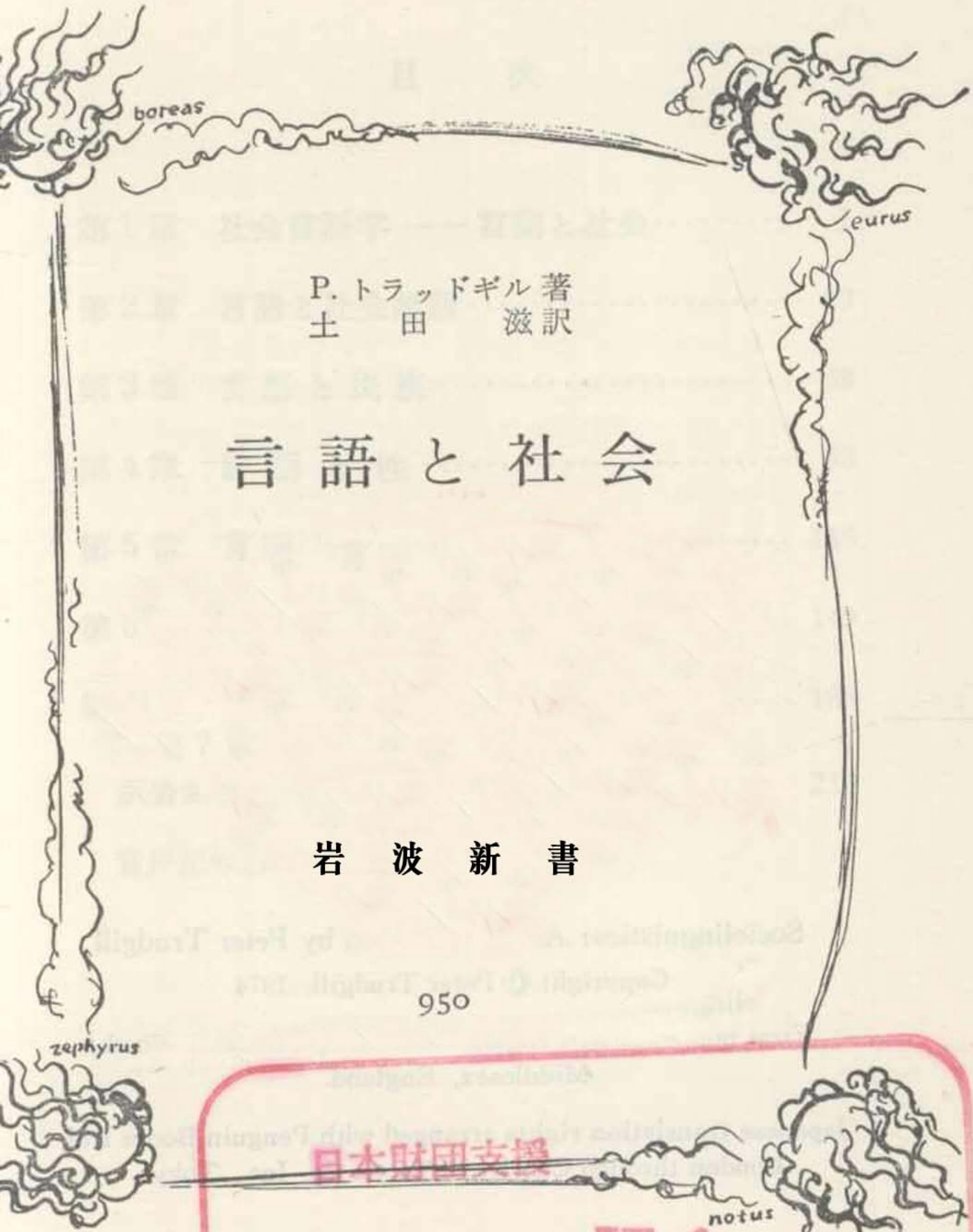
P.トラッドギル著
土田　滋訳

言語と社会

岩波新書

950



P. トラッドギル 著
土　田　　滋 訳

言語と社会

岩　波　新　書

950

日本財団支援
笹川良一記念文庫
財団法人日本科学協会

土田　滋

1934年東京に生まれる
1958年東京大学文学部言語学科卒業
1975年エール大学大学院言語学科博士課程卒業
専攻—言語学，アウストロネシア諸語
現在—東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
著書—「Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology」「Grammatical Manual of Philippine Languages」(共著)

言語と社会　　岩波新書(青版) 950

1975年12月22日　第1刷発行 ©

¥ 230

訳　者　土田　滋

発行者　岩波雄二郎

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・製本　法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目　次

第1章　社会言語学――言語と社会……　1

第2章　言語と社会階級……　29

第3章　言語と民族……　59

第4章　言語と性……　93

第5章　言語と場面……　115

第6章　言語と国家……　149

第7章　言語と地理……　185

訳者あとがき……　215

音声記号(目次裏)

第1章　社会言語学——言語と社会

列車のコンパートメントに，今まで互いに会ったことのない二人の英国人がたまたま向い合わせの席に坐ったとしたら，いったいどういうことが起こるだろうか．考えるまでもあるまい．この二人は，まず間違いなく，その日の天気のことについて話し始めるに違いない．天候という話題にこの二人がたまたま興味があったからそういうことになった，という場合もあるかもしれないが，ほとんどの人は，別に気象条件の分析に格別の興味があるというわけでもないだろう．してみると，こういったたぐいの会話が始まるについては，何か別の理由があるからに違いない．

二通りの解釈が考えられる．第一の解釈によれば，こういうことになる．知らない人と一緒になって，しかも何も話さないというのは，かなり気まずいものだ．黙りこくっていると，雰囲気がややもするとこわばって来る．ところが天候といったような何でもない話題について話しかけると，実際には大したことを言わなくても，相手の人とある種の関係を結ぶことができる．列車のコンパートメントでこういった会話が行なわれるということは——伝説的に信じられているほどひんぱんに起こることではもちろんないのだが，しかし起こることは起こる——言語が果す重要な社会的機能を示す一つの好い例である．言語はただ単に情報——天候であれ何であれ——の伝達手段であるだけではない．言語というのは，他の人といろいろな関係を結び，その関係を保っていくための重要な手段でもあるのだ．上にあげた二人の英国人の会話の例でおそらく最も重要なことは，彼らが何についてしゃべっているかということではなく，現に話し合っているという，その事実なのである．

もう一つ別に，第二の解釈もある．上の例で，一方の英国人が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もう一人のことを，たとえばどんな仕事をしているのだろうかとか，どういう社会的な地位を占めている人なのかとかいったことについて，おそらくは無意識のうちに知りたいと思うであろうことも大いにあり得る．こういった情報がないと，その人に対して自分がどのような態度で接したらいいのか，落ち着かない気分になるだろう．もちろん身につけている服だとか，その他目につくヒントから，あれこれ知的想像力をはたらかせて推測することはできる．しかしその人の社会的背景について直接きいてみるというようなことは，少なくとも今のこの段階では到底できない相談である．できることといえば――そしてこういう面についていろいろ考えるのは，やはり無意識のうちに行なわれるのが普通だが――まずはともあれその人を話に引き込むことである．そうすれば多分，その人についてのある種のことが，かなりたやすく分かるものだ．こういう事柄というのは，その人が何を言ったか，ということよりもむしろ，どう言ったか，ということによって知ることができる．というのは，私たちが何か話すと，自分の生まれやどんな人間かといったことについての何らかの手がかりを，必ず聴き手に与えてしまうものなのだから．発音の訛りとか言いまわしによって，どの地方から来たのか，あるいはどういうバックグラウンドを持った人間か，などが分かるし，さらにはどういう物の考え方をし，どういう心情の持主かについても，ある程度分かる．そしてこういう情報がすべて相手に利用されて，私たちについての評価を下す助けとなるのである．

言語行動のこれら二つの面，つまり，第一に種々の社会的関係を結ぶという言語の機能と，第二に話し手についての情報を伝えるという言語の役割，この二つは，社会的な立場から見て大変重要である．私たちはここでしばらく「手がかり提供」という，言語の果す第二番目の役割について話を進めて行きたいと思うが，しかし言語行動のこれら二つの面は，ともに，言語と社会との間に密接な相互関係があるという事実を反映するものであることは

明らかである.

上の例で，たまたま同乗した相手の人について何らかの手がかりを得ようとする際，その英国人は，社会的あるいは地理的に異なるバックグラウンドを持った人は違った種類の言語を話すという，その習慣の違いを利用する．もし相手がたとえばノーフォーク出身の人だとすると，その人はおそらくその地方の人たちが話している種類の言語を使うだろうし，もしまた彼が中流階級の実業家だとすると，その種の人たちが話すと普通考えられているそういう種類の言語を使うに違いない．こういう「さまざまな種類の言語」というのは，よく「方言」と呼ばれる．今の場合，はじめのは地域的な方言であるし，次のは社会的な方言というわけである．方言ということばはよく使われるから，大抵の人はよく知って分かっていると思うだろうが，実はこれを定義しようとすると，それほど容易なことではない．そしてごく普通によく使われる言語とか訛りとか，私たちもすでに使って来た二つの用語についても，同じことが言えるのである.

ここでしばらく，方言と言語という用語についてだけに話しをしぼることにしよう．この二つのどちらも，別に際立ってきっぱりとした概念を表わすものではない．たとえば方言について言えば，ノーフォーク方言とかサフォーク方言とか言うことができるが，一方ノーフォーク方言の中にもたとえば東部ノーフォークとか南部ノーフォークなどのように一つ以上の方言を指すこともあり得る．またノーフォーク方言とサフォーク方言との間の区別も，それほどすっきりしたものではないのである．もしノーフォークからサフォークへと旅をしながら保守的な農村の方言を調べて行くと，少なくともある点では，これらの方言の言語的な特徴がある地点から他の地点へと行くに従ってだんだんに変っていくのが分かるだろう．ノーフォーク方言とサフォーク方言の間にはっきりした言語的な境い目はないのである．どこでノーフォーク方言が終り，どこからサフォーク方言が始まるのかを，言語学的に述

べるのは不可能なのだ．もしもこの二つの方言を分ける線を県境に求めるならば，私たちはその決定を言語的な事実というよりむしろ社会的な(この場合には地方行政的・政治的な)事実に基づいて行なうことになる．

同じような問題は，言語という用語についても生ずる．たとえばオランダ語とドイツ語は二つの異なる言語とされている．ところが，オランダとドイツの国境線に沿ったある地点では，国境の両側で話されている方言が非常によく似ているのである．もしも，国境のこちら側の人たちはドイツ語をしゃべるが，あちら側ではオランダ語をしゃべる，というような言い方をすると，またもや言語的な事実というよりは社会的・政治的な事実に基づくことになる．この点はさらに次のような事実があるからいっそうはなはだしい．つまり，この国境の両側の住民が互いに理解し合える能力は，ここの地域のドイツ語の住民がオーストリアとかスイスなど遠く離れた地方のドイツ方言を理解し得る能力よりもはるかに高い場合が多いのである．ある人が何語をしゃべっているかを決めようとする際に，もし二人が互いに理解し合うことができなかったら，その二人は違う言語を話しているのだと，まあそう言おうと思えば言えるだろう．同様にもしその二人が互いに理解し合えたら，彼らは同じ言語の方言を話していると，言えないこともない．ところがこういうやり方でいくと，明らかにオランダ語とドイツ語の場合には，いや本当はもっと他の場合でも多くはそうだが，いささか奇妙な結果になってしまう．

したがって，「相互の理解度」という基準や，その他純粋に言語的ないろいろの基準は，言語とか方言とかいう用語の使い分けに関しては，あまり重要ではないことになる．それよりももっと重要なのは，政治的な，そして文化的な要素なのであって，その中でも特に自律性(autonomy)と他律性(heteronomy)という二つが最も大切な要素である．オランダ語とドイツ語は自律的であると言うことができる．なぜならば，両者ともに独立した統一され

た言語であって，いわばそれ自身の生命を持ったものだと言うこともできよう．ところが一方，ドイツやオーストリア，ドイツ語地域のスイスなどの方言は互いにひどく違うし，またある方言などはオランダ語の方言に非常に近いけれども，標準ドイツ語との関係から言えば，すべて他律的である．なぜならこれらドイツ語方言の話し手たちはドイツ語を自分たちの標準語と考えており，ドイツ語で読み書きをし，そしてドイツ語でラジオやテレビを聴いているのだから．同様に，国境のオランダ側の方言の話し手たちは，オランダ語で新聞を読み，手紙を書く．そして自分たちの方言を統一化しようとする際には，それがどのような変化であれ，標準ドイツ語ではなく標準オランダ語の方向に向って起こることだろう．

言語と方言という二つのことばが持つ社会・政治的な性質をよく示しているいっそうはなはだしい例は，スカンディナヴィアの場合であろう．ノルウェー語とスウェーデン語，それにデンマーク語は，三つの異なった国家に対応して，それぞれが自律的な標準語である．ところがこの三国の教育を受けた話し手たちは，みんな互いに自由に意思を伝達し合うことができる．しかし相互に理解し合えるからといって，ノルウェー語とスウェーデン語とデンマーク語が実は同じ言語であると言ってみても，大して意味はなさないだろう．そんなことを言えば，政治的ならびに文化的な事実に真向うから抵触することになる．

さまざまなタイプの言語をいくつかの異なる言語または方言に分かつためには，純粋に言語的な基準だけを使ったのでは困難であるということをこれまで論じて来たわけだが，実はこれは，言語と社会を研究しようとする時，いつもぶつかる問題との最初の出会いなのである．非連続性(discreteness)と連続性(continuity)というのがその問題で，言語的そして社会的な現象を一つ一つ別の実在物に分割することが，一体，現実に何らかの根拠があるのか，それとも単に便宜上の作りごとにすぎないものなのか，とい

う問題である．これがまことに大きな問題であることはやはり指摘しておくべきだろう．というのも，たとえば「コックニー」とか「ブルックリン訛り」，「ヨークシャー訛り」，「黒人英語」などと，それらがまるではじめから分かりきっていて，独立した，他とはまったく異なる変種であり，はっきりと定義された，明らかな特徴を持つものであるかのように言うことが多いからである．「……訛り」とか「……方言」と言って，それらが他とはっきり区別されたものであるかのように扱うのは，たしかに便利なことが多い．しかし本当は，事態はこれよりはるかに複雑であるかもしれないということを，よく心得ておかなければならない．たとえば「カナダ英語」とか「アメリカ英語」とか呼んで，これら二つがまるで違う実在物であるかのように言うことがある．ところが実は，カナダ英語のすべての変種に共通して存在していて，かつアメリカ英語のどの変種にも見出されないというような言語的特徴は，たとえ一つでも見つけるのはまことに難かしいのである．

ここでふたたび純粋に言語的な事実に立ち戻って，方言と訛りの区別をこの時点ではっきりさせておかなければならない．方言ということばは，厳密に言うならば，発音と同時に語彙や文法の点で異なるいろいろな言語間の違いを指すのに対し，訛りというのは発音の違いだけを指す．この二つをはっきり区別しておくのは大切なことで，英語について言えば，標準英語として知られている方言の場合，特にそうなのである．この方言は多くの重要な点で英語の他の方言とは異なるが，人によってはこの標準英語すら方言と呼ばれるのを見て驚くかもしれない．しかしそれが英語の他の変種とは文法的にも語彙的にも違うという点では，標準英語と言えども方言の一つにすぎない．言い換えれば，方言ということばは何も非標準的な変種だけでなく，すべての変種に適用され得るのである．(特定の言語について言及するのではなく．いかなる種類の言語にも適用される中性的な術語として変種(variety)ということばを今後使用することに注意されたい．)

標準英語というのは，普通，出版物で使われたり，通常，学校で，あるいは英語を母語としない人たちに教えられる，そういった種類の英語の変種のことである．それはまた，通常，教育を受けた人々によって話され，ニュースの放送といったような場合に使われる，そういう変種でもある．ここで注意しておかなければならないが，標準語と非標準語との違いは，あらたまった堅い言い方(formal)とくだけた口語体(colloquial)との違い，あるいは「悪い言い方」というような考えとは，原則的に何の関係もない．標準英語の中にもあらたまった言い方と同時に口語的な言い方もあるのであって，標準英語の話し手といえども口ぎたなくののしることだってやはりある．（もし誰かが卑俗な表現や口語的な言いまわしをすると，それはその人が標準英語を話していないことを示すものだと考える人が多いらしいから，このことは特に指摘しておくのも無駄ではあるまい．）歴史的に言うと標準英語というのはロンドンやその周辺で使われていたいろいろな方言から発達したものなのであって，宮廷や大学の学者や作家や，後にはパブリック・スクールによって，何世紀もかかって次第にこれらの方言が修正されて形成されたものなのである．時がたつにつれ，首都ロンドンの上流階級の人たちが使う英語は，他の階級の人たちのそれとは著しくかけ離れるようになり，やがて，英語を上手に話したり書いたりしたいと願う人たちすべてにとって，その手本と見なされるに至った．印刷術が普及するようになると，この種類の英語が必然的に最も広く本に使われることになり，その後幾多の変化をこうむりながらも，最も広い層の人たちによって認められた英語として，その地位を保って来たのである．

標準英語の中にもいくつかの地方差があり，これらの違いは人の注意を引きやすい．標準スコットランド英語は，たとえば標準イングランド英語とは必ずしも同じではないし，また標準アメリカ英語ともいくらか違っている．その違いの中には，いくつかのよく知られた語彙項目，たとえば英語の lift に対して米語

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の elevator のようなものもあり，また次の例のような細かい文法的な違いもある：

英国英語：I have got
米国英語：I have gotten
イングランド英語：It needs washing.
スコットランド英語：It needs washed.

また，もっと狭い地域に見られる変異もいくつかある．たとえばイングランド中北部地方の一部では，南部と対立して次のような差がある：

北部：You need your hair cutting.
南部：You need your hair cut.

しかし大体のところ，標準英語は広く認められた，成文化された文法と語彙を持っていると言える．教育を受けた人々，特に権力があり影響力の大きい地位を占める人々の間では，何が標準英語で何がそうでないのかについて意見が大体一致しているのである．標準英語は，広い地域にまたがって存在する地域方言の上からいわばかぶさっているわけで，その意味では言語のかぶさり変種(superposed variety)とも言うことができる．

ところが発音となると，このような意見の一致は得られない．これこそが英語の標準的な発音だと皆が例外なく認めるようなものはないのであって，少なくとも理論上は，どんな地域的あるいは社会的訛りをつけて標準英語を話すこともできる．(実際には比較的教育程度の低い人たちと結びついた普通非常に狭い範囲の人たちによって行なわれる訛りがあって，こういう訛りはあまり標準英語と共に現われるということはないが，しかし標準英語とある特定の訛りとの間には必ずしも必然的なつながりがあるわけではない．) ところが標準英語にしか現われない訛りが一つある．それが British English の発音，より正確には English English の

発音であって，言語学者の間では「容認発音」(received pronunciation, RP と略す)として知られているものである．これは主に英国のパブリック・スクールで発達した訛りで，つい最近まで BBC 放送のアナウンサーはすべてこの訛りで発音できることが要求されていた．これは通俗的にはたとえば「オックスフォード英語」とか「BBC 英語」とか，いろいろな名前で知られており，英語が母語でない人が英国の発音を学ぶ際には，今日でもなお教えられている訛りなのである．

RP は，それを使っている人でも自分の出身地は RP 地域以外の何物でもないとみずから認める人が非常に少ないという点で，一風変わっている．RP は(オーストラリア，ニュージーランド，南アフリカ，カナダの一部と同様)イギリス諸島の他の地域でも権威を持っているが，しかし強いてどの地方に特有な発音かと言えば，それはイングランド地方に限られている．ところが英国全体をとってみれば，RP というのはどの地方に固有の発音とは言えないのである．標準英語を話すためには RP を発音しなければならないというわけでは決してない．標準英語は地方的な訛りをつけて話すことがあり得るし，また事実多くの場合は通常そうなっている．

言語は一つの社会現象であるから，社会構造やその社会の価値体系と密接に結びついている．したがっていろいろな方言や訛りも，その評価のされ方は種々様々である．たとえば標準英語は他のどの英語の方言よりも高い信望と権威とを持っている．それは多くの人々によって高く評価され，経済的・社会的・政治的な利益なども，標準英語を話し書く人たちに自然有利となる傾向がある．RP 発音もまたある種のアメリカ発音と同様非常に高い権威を持っており，事実，英語を話すほとんどの社会での「因習的な良識」によると，それはさらにいっそうはなはだしい．標準英語とそれに伴う発音があまりにも権威を持ちすぎるようになった結果，それらはすべて「正しい」とか「美しい」，「素敵だ」，「純粋

である」などと広く認められるようになってしまった．その他の標準英語でない変種は，「間違っている」，「きたない」，「訛っている」，「だらしがない」などと考えられていることが多い．それどころではない．英語と言えば，すなわち標準英語のことだとさえ考えられ，そうすると英語の他の変種はすべて正常なものからはずれたもの，それもだらしなさ，無智，知性の欠如に由来する逸脱であるとすら考えられるに至った．かくして英語を母語とする何百万の人たちは，自分たちは「英語がしゃべれない」のだと思い込まされるようになったのである．

ところが実は，標準英語なるものは，特に重要なものではあるにせよ，たくさんある中でのただの一つの変種にすぎないのであって，言語学的にはそれが他の数ある変種より優れているものだなどとは到底言うことができないのである．言語の科学的研究が進むにつれ，すべての言語，すべての方言は，言語体系としてどれも等しく優れたものであるということを，ほとんどの学者は確信するようになった．ある言語の変種は，そのどれを取ってみても，独自の構造を持った，複雑な，そして規則によって支配されている体系なのであり，それら変種の話し手の必要にまったくかなったものなのである．したがって言語のこの変種は正しいとか純粋であるとかいう価値判断は，言語的というよりはむしろ社会的なものであり，標準語でない変種が劣っているというべき言語的な根拠は全然ない．もしも他より劣っていると思われるものがあるとすれば，それはただその変種の話し手が経済的に恵まれておらず，社会的に低い人々だからというにすぎない．言い換えれば，標準語でない方言に対して人がとる態度というものは，その社会の社会構造を反映した態度のことであり，逆にその人が社会的にどのように評価されるかは，言語のどの変種を話すかという判断に反映されているとも言うことができよう．たとえば極端に都市化されてしまった英本国では，デヴォンシャーとかノーサンバーランドとか，あるいはスコットランド高地などのような田舎

の訛りが，心地よい，魅力的である，古風な趣きがある，楽しい，などと普通考えられるのに対して，バーミンガムとかニューカースル，ロンドンなどの都会の訛りは，しばしば汚なく，無頓着であって，不愉快なものと考えられている．田舎の言葉に対する人々のこのような態度は米国ではあまり一般には認められないが，この違いは田園生活がこの両国でどのように評価されているかという，その違いを反映しているものと考えてもいいだろう．

言語のある変種なり特徴なりが正しいとか純粋であるとか言う際に，どれほど言語的というよりも社会的な判断に基づいて言っているかを示す好い例が，次の例に見ることができる．英語のどの変種でも，rat や rich のような単語では /r/ 音を持っており，またほとんどの変種は carry や sorry でも /r/ を持っている．ところがいくつかの変種では，cart や car などの単語では /r/ を持たない．これらの単語はその綴りが示すように昔は /r/ 音があったのだが，これらの変種では母音の前に起こる場合を除いて /r/ を失ったのである．母音の前に現われる場合以外の /r/ は——たとえば語末(car)や子音の前(cart)の /r/ は——一括して「母音の後の /r/」と呼ぶことにしよう．(厳密に言うとこの言い方は正しくない．なぜなら「母音の後(postvocalic)」と言うと，carry などの場合も含まれてしまうから．しかし「母音の後」という言い方は一般によく用いられるので，ここでもそれに従うことにする．)母音の後の /r/ がない英語の中には，米国と西インド諸島の若干の変種，イングランド，ウェールズとニュージーランドのかなりの数の変種，それにオーストラリアと南アフリカのすべての変種が含まれる．これらの言語では，ma と mar のような一対の単語は全く同じように発音される．さて，英国と米国の英語をこの点で比較してみると，実に驚くべきことが判明する．英国では，他の条件は同じとして，この母音の後の /r/ を持たない変種の方が，それを持っているものよりも社会的地位が高く，より「正しい」と見なされている．権威ある発音である RP はこの /r/ を持って

おらず，ラジオ，テレビ，演劇などで母音の後の /r/ を発音すると，その人物は田舎者か無学者か，あるいはその両者を示すものとして使われているし，またラジオの喜劇物ではコミカルな効果を与えるために使われることもある．ところが米国では，実情はもっと複雑なのだが，ところによってはこの正反対の場合がある．ニューヨーク市では，他の条件が同じだとすると，母音の後の /r/ を発音する方がしないものより権威があり，より「正しい」と見なされているのだ．car や cart を /r/ なしで発音すると，それは社会的に低い人々が使うものだと見なされ，一般に社会的な階級が上であればあるほど母音の後の /r/ が多く使われる傾向がある．この二つのタイプの発音が両方聞かれる英国の町，たとえばブリストルやリーディングなどでは，このパターンはまったく逆である．つまり言語についての価値判断は，言語的には，良いも悪いも，そのどちらにでも取られ得るということである．母音の後の /r/ が良いか悪いか，正しいか間違っているか，あるいは教養があるかないか，などを示す言語的な根拠は，それ自体の中には何もない．こういったことを決めるのは，ある特徴がその地域で社会的に何を意味するかという，表には現われない言外の意味に基づく社会的な判断をよりどころにして行なわれるのである．

しかしだからと言って，社会はいろいろな言語の変種に対していろいろ異なる評価を下すという事実を言語学者が認めていない，というわけでは決してない．言語を記述する時には，どういう場面ではどの変種を使うのが適切であるか(「正しいか」ではない)をも記すし，外国語教育プログラムも普通は標準語を教えるように組み立てられている．しかしそれと同時に，上に論じたような，種々の変種に対して取る人々の態度が，ある場合には害になることもあり得る，ということも，ますます多くの言語学者が指摘しているのである．たとえば，標準英語を教える教師が，標準でない変種を話す生徒に対して悪感情を持つようなことがあれば，これは社会心理学上，また教育学上，まことに望ましからぬ結果を

もたらすことになろう(56, 88ページ参照).

言語学者はまた他の理由もあって，言語に対する主観的な態度に注意を向ける．というのも，たとえばそれは言語変化の研究にとっても重要だからで，ある方言が変化するとすれば，どうして変化するのかを説明するのに役立つこともあるからだ．ニューヨーク市における語法を最近調査した報告によると，第二次大戦以来，母音の後の /r/ の現われる率が，上流中産階級(upper middle-class)では著しく増加しているそうである．この変化は，母音の後の /r/ が標準的あるいは権威ある特徴と見なされている地域から大量の人が戦争中にニューヨーク市に流れ込んだことにも原因があるのかもしれないが，もっとはっきりしているのは，ニューヨーク市のすべての人がこの種の発音に対していだく主観的な態度に変化が起こったためなのである．母音の後の /r/ が権威ある特徴と見なされているかどうかを見るために，インフォーマント(被調査者)の主観的態度についてのいろいろなテストが調査の際に行なわれた．/r/ が権威を示すしるしだと答えた人は，「r 肯定派」と名付けられた．第1表は，上流中産階級を三つの年齢層に分けて，「r 肯定派」の比率とその /r/ が普通の会話で実際に現われる比率の平均値を組み合わせて示したものである．これを見ると，40歳以下の年齢層では，母音の後の /r/ に対して好意的な評価を下す率が増加していることがはっきりと分かる．またそれに対応して，この /r/ が実際に現われる率も若い層ではますます増加していることもよく分かる．他の証拠から見ても，主観的な態度の変化は言語変化の結果起こったものではなく，むしろ逆にそ

第1表　母音の後の /r/ に対する態度と実際の使用：ニューヨーク市の上流中産階級の場合

年齢	r 肯定派の%	/r/ が使われる%
8–19	100	48
20–39	100	34
40+	62	9

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com